令和７年度　大学との連携事業「つながる学び　みと☆Future College」実施報告書

拠点校名　　水戸市立寿小学校

連携大学　　筑波大学

研究主題　　「できる・分かる・関わる」楽しさを味わう体育学習の在り方
～自己の体の動きを知り、自己や仲間の考えたことを他者に伝える活動を通して～

１　主題設定の理由

本校は令和６年度から、長期寿命化による建替工事により、運動場のスペースが限られており、全学年での外遊びができない現状にある。そのため、十分な運動量の確保が難しくなっており、進んで運動に取り組む児童が少なくなっている。また、体育の授業において、走・跳・投などの動き方に対して、「できた・分かった」と実感しながら楽しく取り組む姿勢や自分の考えを仲間に伝えることに対して苦手意識をもっている児童が多くいる。特に、ボールを扱う運動の様子を見ていると、ボールに対して恐怖心を抱いてしまっていたり、ボールを扱いながら同時に動くことに苦手意識をもっていたりする児童がいる。

このような課題の要因として、「挑戦したい、少しでもやってみよう」と思える場の設置やボール運動に「取り組んでみたい」と思う教材の工夫が少ないことがあげられる。また、外遊びや放課後の時間にボールを扱うことが少なくなっていることで恐怖心や苦手意識が出ていることも要因としてあげられる。

そこで、ボール運動を通して、自己や仲間の考えたことを他者に伝える活動を工夫することで、「できる・分かる・関わる」楽しさを味わうことができると考え、本主題を設定した。

２　研究のねらい

自己の体の動きを知り、自己や仲間の考えたことを他者に伝える活動を通して、「できる・分かる・関わる」楽しさを味わう体育学習の在り方を追究する。

３　具体的な取組内容

(1) ボールゲーム(ネット型)の研修会

① 実施日　　令和７年８月 18 日

② 講師(授業者)　筑波大学体育系教授
三田部　勇先生

③ 実施学年　　低・中・高学年ブロック

④ 実施方法　　職員研修（市内小中学校体育主任・寿小職員）

⑤　実施内容等

児童の技能向上のための指導法や教具の工夫、場の設定等について、三田部先生による模範授業を通して、研修会（**資料１**）を行った。

主に、発達段階に応じた内容、発問の仕方や場の設定の仕方で、必要な技能が習得できることを知ることができた。

資料１　研修会の様子

(2)　５年生による実践発表

①　実施日　　令和８年１月 28 日

②　授業者　　黒羽　知貴

③　実施学年　第５学年

④　単元　　ボール運動「ネット型」

⑤　実施方法

・公開授業(市内小中学校体育主任・寿小職員)

・指導講評　三田部　勇先生

・グループ協議「ボール運動における６年間の系統性について」

⑥　実施内容

ボール運動「ソフトバレー」において、８時間構成で行った。１時間の授業の構成を「タスクゲーム→作戦タイム→ゲーム」の流れで統一した。単元をキャッチバレーからソフトバレーの流れに構成した。スモールステップを踏みながら、「できた、やってみたい」を実感し、必要な技能習得に向けて、下記の内容を実践した。

ア　教材・ルールの工夫

柔らかいボールを使ったことで恐怖心を減らし、ボールをよけずに拾いに行き、打ち返せるようにした。また、「キャッチあり」や「ワンバウンドあり」といったルールを取り入れることで、「味方が受けやすいパスをするための動き」、「ボールを持たない人の動き」についての考えを共有し、ソフトバレーに必要な動きを身に付け面白さや楽しさを実感できると考えた（**資料２**）。

資料２　やわらかいボールの使用

イ　ＩＣＴの活用、作戦タイムについて

１チーム４～５人編成にし、撮影や審判など、役割分担を行った。課題解決のために、撮影した動画を活用し、具体的に課題解決をしていけるようにした。様々な役割を経験することで、それぞれの視点からの気付きをもとに技能習得が進むと考えた（**資料３**）。

資料３　作戦タイムの様子

ウ　振り返りについて

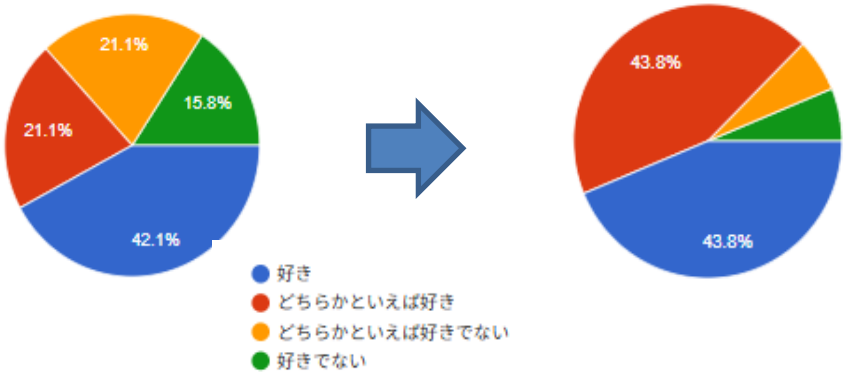
毎時間に行う振り返りでは、「パスの仕方で意識したこと」「ボール方向への動き方」という視点で記入するとともに、振り返りを全体で共有し、次時への課題を引き出すためにも活用した。他の児童がどのようなことを考えて取り組んでいるのか、どのような動きをすることで課題解決につなげているのかを確認できるため、児童同士の学び合いにつながるようにした。

４　成果（進捗状況と今後の課題）

【成果】

(1)　アンケート結果から

①　バレーボールが好きですか？



授業実践前には、ソフトバレーボールが「好き」「どちらかといえば好き」と答えた児童は、63.2%であった。授業実践後には、87.6%となり、24.4%増加した。「味方が受けやすいパスをすることができた」といった声が出て、具体的に考えをもち、ポイントが焦点化されたことで、「できた」「楽しかった」ことを実感できた児童が増えたと考える。前時の振り返りを活用したことで、頑張るべきポイントを一つ決めて取り組むことができ、課題解決に向けて、意欲的に取り組めたことも肯定的意見が増加した要因と考えられる。

(2)　５年生による実践発表

ア　教材・ルールの工夫

事前アンケートから、ボールに対する恐怖心や顔に当たってけがをしそうといった不安があげられたため、前半にキャッチバレー、後半にソフトバレーボールを行う単元構成にした。キャッチバレーを行ったことでバレーボールのレシーブ・ト

ス・アタックの動き方を確認し、ボールに対する恐怖心を減らすことができた。また、ワンバウンドをありにするなど、児童の実態に応じたルールに変更することで、ボールに向かって拾いに行くことや味方にどのパスをすればいいかを考えることができた。さらに、ルールが簡易化されたことで毎時間の課題を解決するために、身に付けなければならない動きについて意見を出し合い、活動が活発化された。

イ　ＩＣＴの活用、作戦タイムについて

ゲーム中において、撮影担当の児童が撮影した動画を活用し、作戦タイムを行った。自分が感じたことだけでなく、ボールを持たない人の動きやパスの仕方などを客観的に見ることでチームに応じた具体的な作戦を立てることができた。審判係を行った児童からは、コート内に空いているスペースに落とされて点数を取られていたと自チームの課題を発見することができた。試合に取り組むだけでなく、役割を分担しながら試合を運営していくことで、技能面の習得につなげることができた。さらに、様々な視点から試合を観察したことでチーム内のアドバイスも具体的になり、ポイントを共有できた。

ウ　振り返りについて

振り返りを学習カードで行った。学習カードに書かせるだけでなく、最後に全体で共有したことで、他のチームが感じている課題を知ることができたり、課題改善をするために取り組んでいることを確認したりできた。そこで出た課題を次時の課題にしたことで、スムーズに活動に取り組むことができた。また、振り返りの視点を明確にしたことで、自分ができたことを実感できた。また、何を意識して取り組めたのかなどの考えを具体的に言語化し、他者に伝える活動からも、自分ができたことや楽しさを実感できる児童が増えた。

【課題】

ソフトバレーボールに慣れてきたチームに対して、コートの広さを広げたりするなど守備へ負担をかける必要性や、タブレットで撮影する際に、撮る視点を決めて、コマ図で撮影するなど、作戦タイム時の話合いに困らないようにする手立ての必要性がある。また、作戦を立てる際には実際に動かせるものを活用し、２Ｄでなく３Ｄの視点で考えることで、より具体的にイメージすることができると考える。

児童たちが運動をすることに対して、意欲的に取り組める発問や、「できた」と感じることのできる教材づくりを提示していきたい。また、６年間を通した系統的な学びにするために、興味関心を引きながら、技能を向上し、今後も魅力ある運動を考案、設定していきたい。